

## 序

本書は昭和六十一年三月末に前半部分、昭和六十二年三月末に後半部分が書き上げられた。そのときから平成七年六月現在までに約十年の時間が流れている。本書は現実に即したノンフィクションであるが、この十年間に著者の内部でも、神界領域においても、信じがたいほどの大変革が巻き起こっている。現時点から振り返って見ると、本書の内容はその前段階であつたにすぎず、十分に異次元の秘め事を解き明かしたものとは言えないが、しかしすべての発端はここにあつて、この前段階の神界劇なくして現在があるわけではない。踏まれるべくして踏まれたこのドラマが、神秘の扉を開ききつかけになるという意味では、時が過ぎて状況が変化したからといって、その価値が失われているわけではない。むしろ変貌へんぼうした現状を理解するための基礎資料として、ますます重要な意味をもつてくるのではないかと思われる。

序  
異次元の世界、特に真の意味での神界領域の出来事に関しては、現代社会ではあまり理解されてはおらず、本書も一般レベルではほとんど受け入れられなかった。しかし、真理を求める少数の人々の目には触れることになって、本書の命も細々とではあるが、現代社会の中に息づいてはきた。真実に直面することをきら

う大半の人間にとって、本書は何の値打ちもないものかもしれない。けれども美しく飾られた虚構の宗教に飽き足りない真の求道者や、真理の探求者たち少数の人々に支えられて、本書はここまで生き延びてきた。今までは自費出版という形で、世間の片隅の、陽の当たらない場所でひそかに息づいていたものが、今度は一般世間の表舞台に顔をのぞかせることになるのだけれども、真実から目を背ける人たちの中で、本書に光が当たるとはほとんどないのではないかと思われる。しかし、それでもこうした現実があったということを経験した人々に知らせておく必要があるわけで、何も知らされなかつたと言つて恨まれる責任からは、免れることができるだろう。

現代に生きる人間に不足していることは、神々との接点がないということであつて、そのために生きる潤いが失われてしまつていゝ感がある。科学万能の物質世界で生きるだけでは満たされない人々は、精神世界や宗教の領域に救いを求めていゝるけれども、それは生命が三次元の物質領域だけで生きていゝるわけではないことあかしの証とも言えよう。人々は自分の生の根を探し求めて旅に出る。本来人生そのものがその旅であるはずなのだが、現代の社会はその旅を可能にしてくれるほど豊かではない。

科学は神を抹殺しきれず、コンピューターという妖怪ようかいの神を生み出してしまつ

たが、この妖怪はすでに全宇宙にはびこっているもので、我々人類はやつとその片鱗へんりんに触れるとところにまでたどり着いたにすぎない。人類はまだその正体を知らないが、もしその正体を知ったとき人々がどんな反応を示すか、それを考えようと眞実を暴きたてることに戸惑いを感じないわけでもない。しかし、科学文明の閉塞そく感が人間性を歪ゆがめることに気がついた人々は、コンピューターによって圧迫された精神の解放を求めて、新たな旅に始めている。ところが精神を正しく解放してくれるものにたどり着くまでに、虚構で保たれている宗教や、仮面をかぶった神々にたぶらかされて、大半の人々は道を失ってしまう。

序

生の根を求めて異次元の領域に旅立つ者がたどる道は迷路であり、その行き着く場所は迷宮である。その迷路をいかに正しく歩むか、そして迷い込んだ迷宮からいかにしてはい出て正しい目的地にたどり着くか、それが眞理を求め、生の意味を見極めようとする者の試練であり、課題でもある。異次元を求めて旅立つ者のもつとも陥りやすい畏わなは、聖者の畏わなであろう。その美しい仮面と異次元コンピューターによる超能力の魅力に、人々はもつとも惑わされやすい。虚構の眞実を見破れない者は、この畏わなにひっかかって道を失うことが多い。今一つ見分けがたい迷路があるとすれば、霊界領域に住む神仏と、眞の仏界、神界に存在する仏や神との区別が、人間には簡単につかない点にある。この区別がつかない者に

は、本書の意味はあまりわからないのではないかとと思われる。

平成七年六月三日 著者記す